

無軌道

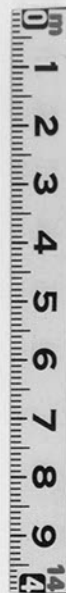
號 月 一

無軌道・第五輯

ボタン	カールサントバアグ
苦き歌	K DE KAIOSAY
雪	横地正次郎
晝の街	石川武夫
雪の中で	猪狩満直
小作人の秋	三野混沌
彼等	三野混沌
劇に就て	高瀬勝男
亡き英夫を憶ふ	叶多太平
雑記(3)	中野勇雄

編輯後記・

摩高
雄雄



ボタン

カール サンドバアグ

私は新聞社の前に廣告のために貼りつけてある戦争の地圖を見てゐた

ボタン——赤と黄のボタン——青と黒のボタン——が地圖の上を前後左右に歩くかされてゐた。

日に焼けた雀班の笑つてゐる青年が

梯子をのぼる、群衆の中の誰かにカイギャクをとばす

それから一寸西の方に黄色いボタンを止める黄色いボタンにつけて黒のボタンを一寸西の方におく(傷に喘ぎながら、水を求めながら、喉つ笛に死がガクガクふるへながら一萬人の男や少年が血に染つたからだを川岸によちる)

雀班の青年が吾々に笑つてゐる新聞社の前の地圖の上の二つのボタンを一寸動かす代價を誰が一體當てるだらうか。

草野心平 譯

苦き歌

K DE KALOOSAY

巡禮のやうに出掛け……

目的もなく無宿に獨り放浪ふんだ……

無情な天に向つては

もはや目をふり向けるな

たゞ笑ふんだ

春の花の魅惑、その無邪氣なる美を

そして渴いた唇を持し

強情に涙を節約するんだ

實に徒勞なる相闘は諦めるんだ

(勝つても幸福をもたらさないだらうから)

愛の淫樂は棄てるんだ

嘔吐のうちに其が殺戮するだらうことを知つてさ

もはや自らを誘惑させるな

女の愛や友達に愛に

(輝かしいもの されど氣をつけよ！)

(2)

それは石鹼の泡のやうに飛び消えるだらうから

雪

横地正次郎

そして若しも希望が恍惚たるものならば
うちふるへる手でそれをつかんぢやいけない
それは救ひの綱ではない
單に切れやすい蜘蛛の巣にすぎないんだ

そしてたゞ行くんだ、目的もなく、されど信じて
理想もなく、欲求もなく

頬つべたに笑ひをたゝへずに
死に關しては 肩をすばめてさ……

凍つた頬つべたと凍つた感覚とで

大地の塊りの上に打ち倒れ

眼を覺まさせる風と共に

絶望の歌をうたひ出すんだ……

(中野 譯)

北風が強い日に畑の中の工場から
または奥上州へ突つ走る汽關車の筒先から
雪空へ吐き出され飛んで行く煙は
踏み切りまで歩いて來た俺の眼に何を滲ませて呉
れたのか
一團の生活の勞働の彼女達を思つた
この商業都市のはづれまで出て
長い堀といかめしい門構へと
狩り集められた彼女の顔とに
俺は連環した影を引伸ばしはしない
そ奴は陰謀と計畫とに歪曲した神經を石炭の色に
叩き込んだ
忘れられたことが當然な理由はない
平坦な眺望の壓縮は腹立たせもしない
稻刈りも終つた片づきかつた村落への路
俺は急ぎたつた思想の斷續に近づいて來る危險を
知つた

實際十里の距離に雪は降つてゐるのだ
風速は休まない
俺は語るべき友への報告を用意すべきだ。

晝の街

石川武夫

電車を乗ると、雨が降り出してきました

傘のない私は

夥しい電燈を花花のやうに連ねた百貨店に這入り
ました。

雪の中で

猪狩満直

さあ、

來年の種物まで賣つて了はねばならない
この貧乏百姓
人間の生活なんざありやしねい
小屋いつぱいの寢床さ

子供は小屋の中に一日中つなぎ馬だ
おれだちはからだごしらぶちこんでその日をおく
る
夕べぐつたり疲れて寢床へぶんのめる死人だ
寒氣と飢と
否、おれだちは土の親みから引きばなされた
、、、
甘い夢をむさばる奴はむさばれ
おれだちには火のやうな呪がある
おれだちには石ころのやうな決意がある。

小作人の秋

三野混沌

半分を
半分を

おれだちのこのあばらやにいらねえうちにたがつ
ていきやがる
いねのかほり、實のかほりするしねえうちに
君、君らが刈りもしねえうちに

(3)

(4)

おれだちは はーはーかりとりかりとりふせた
山の上のおれだち小作人
秋はこの惨情を極める
秋はおれだちから始められるか
きてみる だれもしんねえだろ
まだまだ まつむしがさかんにねえてるんだよ
だが それでも 若い娘はガキ負ぶんね
えて
それにまついながらのふるまいもひかいた
ガキに米買ふて食せねえ
借の代に米でもいいて商人ももつていく
凄く落ちくぼんだあらしの前のくろいつらを
うちあはせてのかりとりだ。

打ち殺す力
かまには充分ありやしねえか
三キツチヨのおかばは、半分
持つてかれるだなあ
幻ではねえ！

身をやつぎにする、おれだちの身をやつぎに
する
かまはいまはそちへ向ける！
あらゆるふくめんの強盗 地×め！
おれだちのきてるるばろの下に
ガキめはしゝめいてつきさがるが
それをゴンキではり叩かれ
叩かれ叩かれ たほれねむる
おれだちもがくたたとたほれねむる
だが決してそちを向いてはねむんねえ
だが又そちのパンをくわせやうたつてくひやし
ねえ
兩手でつつかへす
地租×譲とかも 自×農創定とかも×の買上とか
も、
みんなそちむきだ
おれだちはそちをむきやしねえ
おれだちのこの完全に君らからの頑固、情愛は
おれだちは一かたまりに死んでも一つだ

否、死んでなとゐられるか
斷じて一つかたまりだ
おれだちの米俵にきまつてゐる、みんな
おれだちのだ
みんなおれだちの米俵だ
あいつらので一つもねえかんだ
このおれだちの重量はなくなりやしねえ
たとひ死んだつてなくなりやしねえ

彼等

三野混沌

黒いローム土をワゴンにつけて
移ることをするイングラントの小農
その真似を出来ない彼等は
じつとして居ながらローム土になるまでだ
彼等と彼等の子供と
そしてこの國では誰にもそんなこと許しやしない
んだ
だが地球上の一枚の土地でもとつて作つてみたい

高利をこらへ、物慾は
勞働者になるより
土地を買ひ取つてみた——これはまあ何ていふ馬
鹿だ
打たれ
豊になつた耳を彼等は自然に結びつけるが
悲しい事實のみきく
がんがんといふ豊の耳を
ふりたてて
宇宙的な意志となつた彼等は。

劇に就て

私達は新しい劇場を必要とする。墓場の如く去勢
されに舞臺と、カタツムリの如き憶病な舞臺に、
陶酔と興奮をゆだねるには餘りに私達の現實が力
でみなぎつてゐる。昨日と今日劇場が私達の生活
に何を喜與したか史劇が悲劇になつてゐても、私
達の生産に關連をもたなかつた。
私達は波止場の荷上夫であり、私達は町の浮浪人

(5)

であり、私達は監獄部屋の土工であつたりした。地の底を掘ふ炭坑夫が、私達の会う世界と然々違つてゐた。

歓美を教はり、恭順を教はり、情をも教はつた處で私達は何の興味も感動も得ない。冬が来て寒くなつた時、何よりも暖い綿人と火が大切だ。

劇場は踏襲と法式の結體であり、舞臺は濫解と沈滞である。一日の労働の再生産に出る慰安がつまらない舞臺のどろどろしたお、神よと謂へ偽瞞な厚顔で面に隈取した劇場に明日を約束したくない。

劇場が贅澤する人達の氣組と趣好で獨裁されて精練場で働く職工は貴族達の面目を攪亂することを恐れて居る道德的訓練の結果だと劇場の當事者は誇つた。町のプロレタリアートは劇場と酒場を交換して酒場が兄弟達の握手し合ふ無上の場所にした劇場は生活に屈從を加重した。私は劇場と舞臺が農民の土のであつたら、どんなに潤澤された生活の詩が單的に劇場全部を包んで居たことだらうと思ふ間斷なき私達の動きの表示は劇場を舞臺を

高瀬 勝 男

亡き英夫を憶ふ

この度過ぎしものは一つの眞實であつた。
正しく眞實そのものだつた。

僕は彼を言ふ言葉を知らない。
眞實そのものだつた。

枯淡な、とちも底にあつた「熱」なしめた彼の風貌が、現、歴然とある。彼過ぎて二十日……が、せめて彼が熱愛した秋の花野菊と俱に過ぎし……を彼のために幸福だと思ふて居る。

彼は野菊を愛した、そして、彼は野菊のごとくであつた。昨年の秋……丘が兵營にささげられた其の始めての秋、彼は病を得て歸郷した。そして「秋に病む」を福島民友紙上に書いた。つゞいて「秋意詩篇」をかいた。それは秋冷な人の心にたゞきつたが、それはほんとうにやさしい母の子守唄であつた。概くではなく愚痴るではなく、端正に深く人生を思ひ唄つた。明らかに朗らかに、……そして、それは空行く雁の氣どつた聲ではなく、巷の子、雀のたのしき囁りであつた。

又秋が来た。
「もう除障だらう、早やくかへつて来い。なにを話さんでもいい、たゞ顔見たい。」

と、彼は僕への手紙のさいごにいづもかいた。
が、いま一月足らずで軍隊生活のカラクリから解放されていく

生産に従事しつつあるものの直接遊戯場としたい歌唱ひ欣談する、そして生活の反照が間斷なき所作の具象に効果づけられたゆるみなき労働の凱歌最後に迄白熱する劇場、即ち生産の劇場が法則的に動いていた劇場に變らなければならぬ。

舞臺が昨日の舞臺でなく、劇場が昨日の劇場でなく全労働者の人生觀と世界觀に呼應した實際的劇場でなければならぬ。

金ビカの大禮服と鼻眼鏡の紳士のもつて居た劇場の主權を仕事場から取つたばかりの作業服と野良飯りの百姓の手へうつして直接仕事場と田園へ關係をもたせるのだ。従つて舞臺と劇場が其の儘私達の生活内容であり、生活態度である爲に誤謬に陥ち易い、個人的觀念を集團的に意識つけてゆくことだ。

僕を待たずに、かう相逢ふことたのしんでゐたのに、それなのに僅か行年二十三で十一月六日 彼は逝つた。

僕は、なんとも言へない悲痛な氣持ちである。東京を去つて一年彼は逝つた。同時に、丘のたのしい母の子守唄を朗らかに、そして純眞なものにする、而かもハツカウしきれない、現わすかにハツカウしかけたばかりの詩才は逝つた。

限らない僕たちの哀悼のうちに英夫は逝つた。
嘗て塾中時代、僕たちは真くシヨパンの「送葬の曲」を誦した。それを、いま若くしてみまかりし詩人上達野英夫のために誦さなければならなかつた。

遺友赤津は僕へかいた。

……彼は慧星の詩人ではなく着々と築上げていく詩人であつた。

これは確的な批評だ。

彼は、詩人であつた。神經的な詩人ではなく、だから決して彼の姿は品るいものではなかつた、むしろ逆に灰色の冬の夕暮れを思はせるやうな詩人であつた。カフェーのたゞれた空氣ではなく歡樂をあさつてあせりくるアルコールではなく、神經をもたないともすれば社會のしたづみにされて顧みられない、しかも、人間を限りなく愛した労働者であつた。だから器用な細工など知らなかつた。彼は路傍になげすられたつまらない小石にもコホロギの聲にも人生を感じた。彼は人生そのものだつた。

……アルジョアは人生の品るさを見あい、又知りもしない。

人間のあたい、かい胸と心と、そして語るさはプロレタリアのものだ。文明といふものを知らないやうな見聞らしい姿で、全くモダンボーイとは似てもつかない野暮な顔で彼は人間のドン底から来た。面からも彼はもつとも色彩の強、近代人だつた、彼は鋭い……感覚をもつてゐた。ある時は、民友新聞の記者としてあの虚弱なが、とどつた高い品なもつた顔を街道の埃にむちうだつた『ドン底の肥』をかいた。して彼は上流階級の頼廢しきつたどろ沼と智識階級の無智蒙昧、彼等がいかに醜く、弱いのだかを見た。又ある時は、中央郵便局員として現はれ、又ある時は復興局につとめ炎熱のさなかに火の車をまわす東京の街頭に出た。彼はかうして、つぶさに人間の辛酸を、辛酸の滓までも感めつづけた。そして、彼のすぐれたる詩『牛を思ふ』民友所載をかいた。

牛を思ふ

A

しよぼしよぼと小さな
それでゐて鈍重な、不氣味なその眼りよ！
牛よ！！
首を擡げてたるんだ咽喉の筋肉を引きしめ
ゆるやかな大きな力でうなるんだ。
ゆるまで、ぶかつこうで不器用で

B

忍苦の深い憂鬱は
いまあらゆるものゝ上から拂ひのけられ
大地には更生の息吹が充滿してゐる
牛
お前は草原の一隅に

のび／＼と横たはり
この白日何を夢みて眠るのだ
鼻面に蝶々がたはむれようが
とんばがごみつばちのやうに
目をかすめようと
お前はたゞじつと石像のやうに動かない
何か偉大なものを夢みるやうな牛
どこかにこつそりと物すごい力を集注してゐる
やうな牛
そのくせ何か臆病さうな感情を
その不氣味な白眼の中に藏してゐる牛
おゝ！！ 今
俺だちはお前の眠つて居る思想をゆりうごかし
あらゆるギマンと虚壓と嘲笑とに彼はれた力を
呼び起すのだ
牛よ！ 牛よ
くだらない冥想と
ひとりよがりな高慢ちきな
偉大さうな思想とを
いまはすつかりぶちまけてしまへ

俺だちの眼前にうつつけする
あらゆるまどわしのトリックに
どろどろと腐れた空氣をおしのけて
今こそは
俺とお前と素つばだの握手を交はすんだ。
僕は人生を見た。
彼の詩は、眞實なる人間の聲であつた。額に汗して働らく人間の眞實なる聲であつた。
怒れるではなく泣くではなく、うめくではなく、地をはふてどこからともなくやつて来る弱々しいが底強い人の聲だ。
そこには明日がある！！
聲域時代、僕だちは四人であつた。が、一人は家出しよう一人はこの度僕だちの限りない悲しみのうちに逝つた。 噫々！！
上達野英夫は逝つた、けれど、どうしても彼の死が信じられない切實に感じられない。僕を待つてくれて、手をさしのべて擁いてくれるに異ひない。
早くかへつて来いー
彼は、そう呼んでゐる。
……二八・二一、二〇……
会津若松の兵舎にて
叶多 太平

雜記 (3)

中野 勇雄

× 翻譯

翻譯は難事なる哉。語學の未熟者の僕にとつては殊更に。英語は八年間、義務的にやらせられたが、到底今更に英語を翻譯する氣にはなれない。これには又一つ僕の好悪癖も手傳つてゐるのだが元來僕は英文學は嫌だ。獨逸は生つかぢりだから手が出ないし、他の國語には今更手を出す氣持にもない。

この短い人生を語學に消費するにはもつたないやうな氣がする。

そして僕はエスベランチストになつた。エスベラントに對しては二三年來氣が動いてゐたが、實際に勉強しやうといふ氣になつたのは今年の三月の末だ。僕の経験からしてエスベラントの勉強二ヶ月は英語の五ヶ月には慣する程容易だ。そして單なる英語を勉強するといふ氣分とその氣分がまるで違ふ。エスベラントには生きた精神がある。

その運動も生氣がある。エスベランチスト間の氣分には殊更に新らしき人間的握手の向きがある。現在その實用はあらゆる方面に行はれてゐる。運動、政治、思想、文學、商業交通等々で社會運動などはこのエスベラントによつて國際的な大きな視野が展かれると思ふ。現在 SAT などの運動はすばらしいものであるといふことである。宗教方面に於ては日本では大本教が盛に歐州でこれによつて活躍してゐるのは事實だ。

扨て、翻譯は難事なる哉にもどつて、僕は自分の未だ初歩のエスの力をも恥じずにエスベラント詩人の詩の翻譯をやつてゐる。その拙劣は當事工スベランチストの目笑するところかも知れないが僕にはそれでも僕自身の確信とエスベラント運動の一端に微力を捧げてゐる抱負がある。

翻譯は難事なる哉であるが、殊更に詩に到つては或は翻譯はその詩をうち壊し、變形させるかも知れない危険を持つてゐる。何と恐ろしい仕事なる哉だ。然し僕は一つの過信としてか、それら全ての危懼を排して一つの仕事として翻譯をやつてゐる。

る。讀者もまたそれを諒して僕の翻譯を讀まれんことを願ふ。

序に記すが、K de Kalbeay はハンガリヤ、ブダペストのエスベランチスト詩人である。

エスベランチストの心事

考へてみるにエスベラントの運動は實に血の出る歴史である。ザメンホフが一八八七年に公表してからやつと四十年にしてこの効果をもちたしたのはエスベラントの精神と思想とが強く同志によつて世界の手に散布されたからである。

K de Kalbeay は歌つてゐる——

我らの心に就て……

我らは誇らう 兄弟達よ

我らの心に就て

その痛める打撃に就て！

それは痛める打撃が

我らにあるからだ

それも無情な全世界の爲めからの——

我らは見守る、嘲笑や憎惡——

然し我らの心は

只愛を反射し灼熱するのだ

こんな真冬でも

我らの心は

太陽の輝きだ！

今感覺も涙も氷結して……

太陽よ——我らの心は

寒氣と徒に相關してゐるのだ

然し來るだらう、おゝ來るだらう、時が……

我らの心の爲めに……

我らは春を信じやう

(十二月十六日)

× 高橋新吉詩集を讀む

石川が送つてよこした新吉の詩集。これは佐藤春夫編で南宋書院から出た本だ。私はこれを一讀

して感じた。時代は如何に變つたことよ。その頃
 我らが愛誦した彼の詩を、今この本で讀んである
 と、その何と取り残された思想であるかに驚かれ
 る。否思想でない、その詩の古さよ。諸君この
 詩集は取り残されてゆくブルジョアインテリゲン
 チヤの骨唐品であるより外の何者でもあるまい
 待て、その古さの新しさ、古さの哲學を見よ――

といふ人あらば、私はハイハイといふのみだ。
 詩はマスターベーションではないといふ私見から
 詩を大衆に問ひ度いと思ふ。大衆のうごめきの底
 を通つて先行するもの、その思想と行動とこそ詩
 の持つべき要素であらうと思ふのである。

私はこゝで新吉のみを古いと云ふのではない。
 現在のあらゆる詩人輩が古いやうに見えてならな
 いのだ。殊更に私のいつも期待してゐる新吉のこ
 の詩集を讀んで、新らしく新吉に就て感じた私の
 感想の擴言であるのだ。

されど新吉詩集の中にも私の好きさうな詩が二
 三あつたことを附記する。
 終りに彼の詩二篇を引用しやう。

彼は生きてゐるのではない。
 むしろ彼の頭が働いてゐる丈だ。
 彼の胃袋の中では消化されてゐるものもある。
 全體として彼は生きてゐないのだ。
 彼の頭は生きてゐる。手も足も動かなくなつて
 はゐない。
 彼の目は物を見る力はある。しかしどうして彼
 は生きてゐると云へやう。

私の仕事は斯ふして坐つてゐる事だ。
 之より外に何にも仕事がない。
 アネモネの黄色い大きな花を見てゐると食べた
 くなつた。

× 上遠野英夫君

私は上遠野英夫君を知らない。或は又知つて居
 るかも知れない。そのうちに彼は永久路に行つて
 了つたのだ。残念なことをした。

無軌道第四輯で私は彼の詩を讀んだ。少からず
 感心させられた。この力強い実力を有する彼を失

つたことを無軌道と共に地方詩界の爲めに哀しむ
 混沌の話ではよく福島民友に彼は詩を書いてゐた
 といふことだ。私は残念だ。何故我らは彼を知ら
 なかつたか、彼は又我らに識らせて呉れなかつた
 かを。
 あゝ何かすばらしいものが生まれんとしてそれ
 が流星のやうに消えて行つたやうな氣がしてなら
 ない。詩よ詩よ土の中から湧き上つてくる詩よと
 彼の靈に吊す。
 (十二月十八日)

編輯後記

●吾々は社會から材料をとつてきてそれを藝術にするといふ
 が吾々の懇求が主動體をなす精神であるのだ。昨年本誌發
 行して以來この主張を濃厚にし更に頑強に把持しやうとし
 てきた。社會生活と藝術は直接交渉をもつてゐる。その交
 渉は最も力ある濃潤とした表現法をとらねばならないのは
 言をまたない。

それは社會詩となり社會小説となり、社會と個人、物質と
 精神の間を一つにヒラヒラと又は急遽に、或時は實に愚鈍
 めいて(これも必要)藝術家を介して直接人に響いていくこ
 いちやうと電氣に於けるダイナモ、ヒュウマンダイナモ
 だ。自分自ら作工し社會を改造してゆく熱意だ。

●本誌を文藝的なものでなしに生活問題や、社會問題を提
 げて出るかと考へたが、それは領域が變つていくのでいい事
 だが都合が出来ない。それで當分これで我慢する。出来る
 だけ吾々ドンドン底にある者の爲に身方であり、そこからの吾
 々の闘を起してゆかう、それは吾々の敵で陳であるアルチ
 ヲアジへのバクダンとなり吾々への歡喜や勇氣、吾々の
 生活をつくつていく道具とならう、目鼻とならう。
 ●一九二九年一月號のやうに吾々にはたくさん頁を持て
 ない、然し裏も表もない、これだけのものではあるが押し
 出し進む。
 吾々はさきに數々の同志を失つたが、もう出かけた吾々は
 一歩も退きはしない、
 進む。

混 沌

苦しくとも一月の市場へ無軌道を送つた。

経済的な不足が一番辛い、郵便代でも寄贈してくれれば
 幸甚だ。内容も強めてゐる。

詩人の詩を生産者のもつハンマで鉄で粉碎しなければなら
 ない、詩人の思想がどんなに偉達な生活を導くか偉達は
 詩人に何を教へられた、詩人の誇り得る言葉は偉達の働く
 よりも牛馬だ。(勝 男)

消 息

草野心平君 前橋市神明町五四に轉居盛んに書いてゐる由前橋市から世界的な詩雜誌を發行するといきまいてゐる

磐城平詩集 早春第一輯な是非出版する。期待して欲しい方々から出てゐる雜誌を遠慮なく無軌道社に寄贈して貰ひ度い、こちらからも送る。そしてうんと批評し合つてみやう

原稿並同志 吾々は寂しい。いい同志が進んで入つてくれることを希望する。そして原稿を送つてくれ、男も女も書いてくれ

二月號/切 一月二十日

仕 事

一、講演會

一月中旬、無軌道主催文藝講演會を開催する。大方の士來つて應援せよ

會場 日本キリスト教會堂

二、劇研究會

我々は又平を中心に劇研究會を創始する、これはとてもいい集りにしたい、参加者たくさんあればいいと思ふ、當分無軌道社の方へ申し込まれたい

紹 介

詩 集

『第百階級』 草野心平著
中 込 著者直接 金一圓
取次 府下杉並町字成宗三四ノ下 無軌道社
平町外好間村上野

詩 集

『怯える者の叫喚』 第一輯 五〇頁
發行所 名古屋市南區新尾頭町一四三 一 千 年 社
金十錢

詩 集

『李畑の詩』 杉山市五郎著
静岡縣安倍郡長田村廣野八七〇 李 畑 社
金五十錢

昭和四年一月十三日印刷納本 (定價金十錢)
昭和四年一月二十日發行

送料二錢 半年六十錢 一年一圓二十錢

福島縣石城郡好間村北好間字上野九〇 編輯兼發行人 三 野 混 沌

福島縣石城郡平町仲町二〇 印刷所印刷人 二葉舎 熊澤次郎

福島縣石城郡平町四丁目二十二 福島縣石城郡平町四丁目二十二

マルトモ書店 發行所 無軌道社

釜屋商店

5丁目

TAIRA

電話9番

マルトモ

讀書子の忠實な番頭

文 雜 書
具 誌 籍

平町四丁目
柴田書店